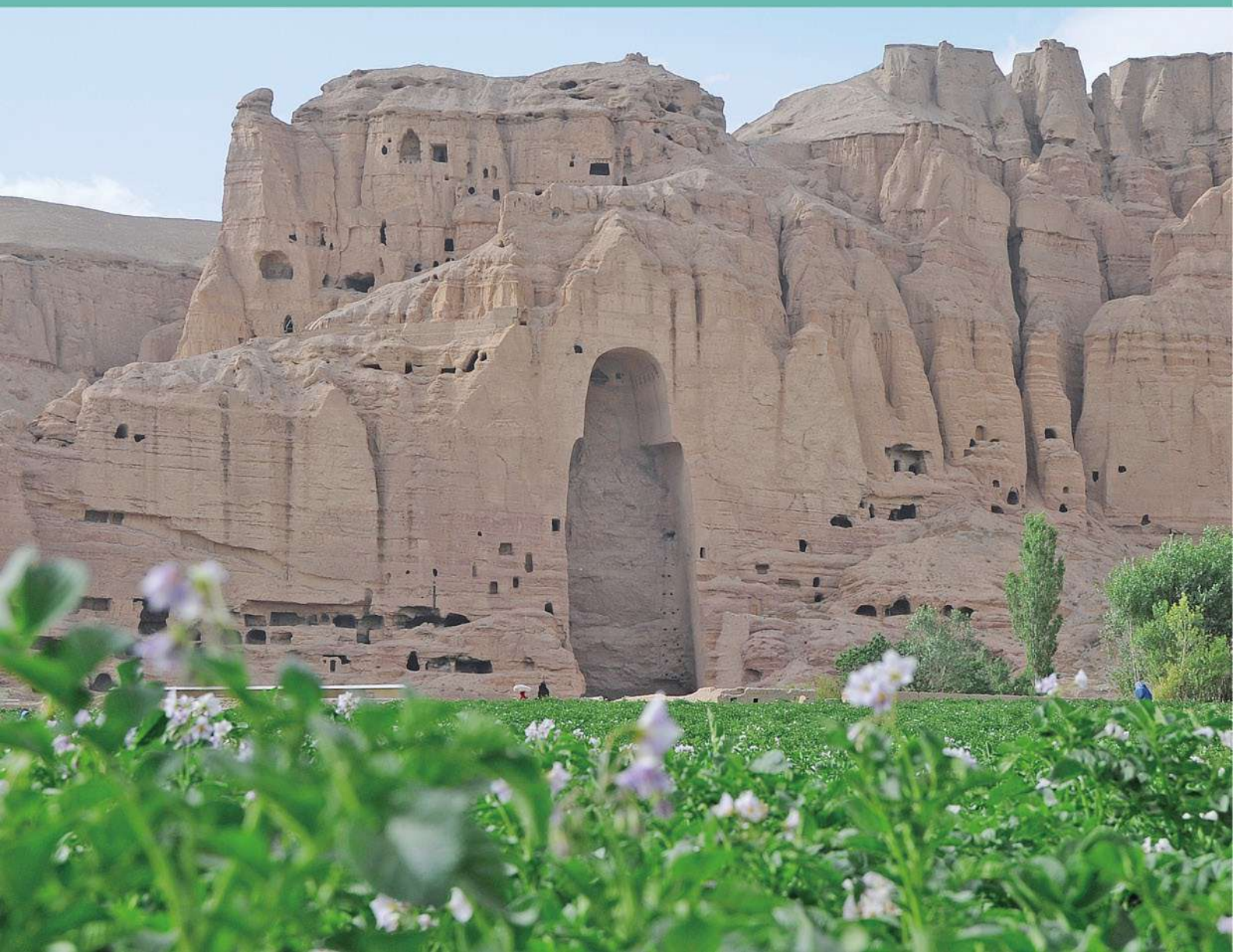
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 文化遺産保護協力事務所

文化遺産ニュース

Cultural Heritage News from NARA

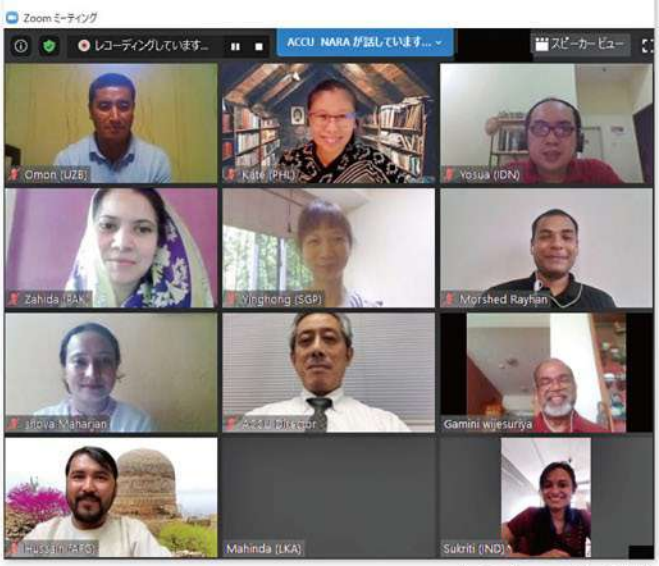
Vol. 33
March 2021

◎集団研修 1
◎個別テーマ研修(ブータン) 2
◎国際会議「博物館と地域社会」 3
◎文化遺産ワークショップ(スリランカ) 4
◎文化遺産セミナー「飛鳥・藤原の歴史的価値と世界遺産」 5
◎世界遺産教室 6
世界遺産「バーミヤーン渓谷の文化的景観と考古遺跡群」 裏表紙



集団研修

2020年9月2日から10月1日まで、アジア太平洋地域13か国からの13名の研修生を対象に「考古遺跡の調査記録と保存活用」をテーマにオンラインで実施しました。

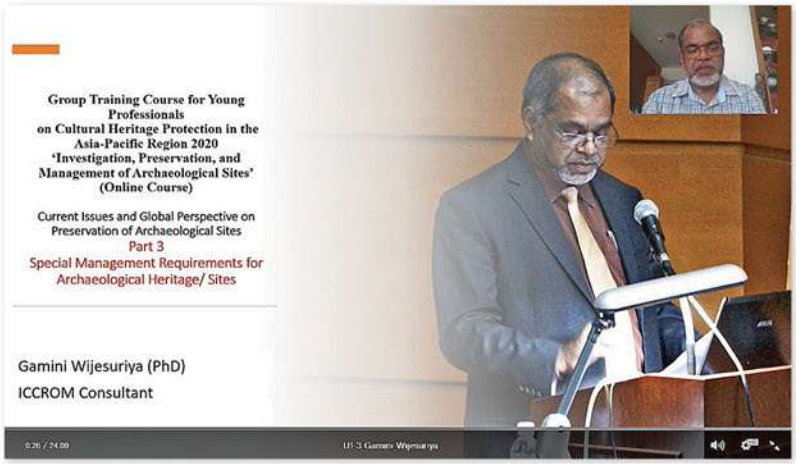


オンラインでの総合討議

集団研修は、ACCU奈良事務所が行う人材養成の中核事業です。「木造建造物」と「考古遺跡」の2種類の研修テーマを、隔年で交互に実施しており、昨年（2020年）は考古遺跡の年でした。

13名の研修生は、政府機関や研究所などで、自国の文化財保護に携わる若者たち（平均年齢34・1歳）で、多くが発掘調査等の現場で活躍中です。

今年は初めてオンラインでの実施となりました。この研修は、実習と臨地研修に多くの時間を充てる特色があったのですが、それがかないません。そこで、少しでも意義のある研修にするためにいくつかの工夫を施しました。

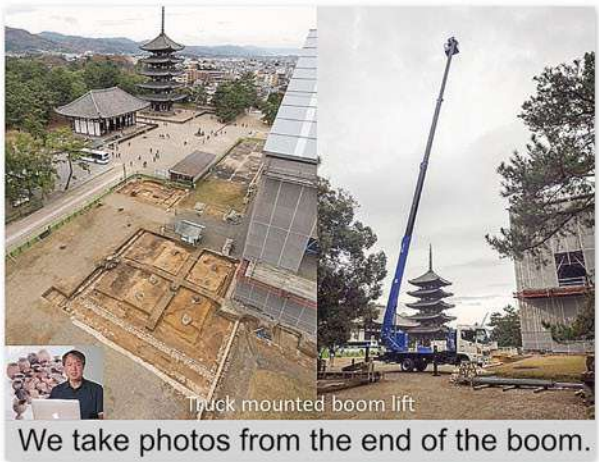


オンライン講義〈文化遺産の保護〉

動画教材を提供する期間を長くして聴講してもらいやすくしました。ひとつひとつの動画は短めにして、小分けにした教材を順に学んでいけるようにしています。元が日本語であった教材はネイティブスピーカーに英語で吹き替えてもらっています。

研修生が多くの国に分散しているのでリアルタイム接続での討議は2回のみとなりました。実施には時差を考慮する必要があります。今回は、講師の先生がいるイタリアが最も西にあり、最も東にあるキリバス（首都タラワ）の研修生との時差は、10時間もあります。

研修の共催機関であるイクロム（文化財保存修復研究国際センター／本部ローマ）の講師との討議は、1回目がウィジェスリヤさんと各国からのレポートについての質疑応答と意見交換を行い、2回目はキングさんと文化遺産の保護と活用について討議を行いました。遠距離接続をものともせず、たくさんの議論を交わすことができました。



オンライン講義〈写真記録〉

参加国

アフガニスタン・バングラデシュ・インド・インドネシア・キリバス・モンゴル・ネパール・パキスタン・フィリピン・シンガポール・スリランカ・ウズベキスタン・ベトナム

カリキュラム（概要）

■動画による講義

「世界の文化財保護の現状と国際憲章」「日本の文化財保護制度」「日本における遺跡の整備活用」「考古遺構の調査法」「考古遺構の記録法」「考古遺物の整理」「考古遺物の保存修復」「博物館収蔵品の保管環境」「考古遺物の写真記録」「文化遺産の保存と活用」「平城宮跡の整備事例」

■リアルタイムセッション

研修生各国の「遺跡保存活用の実情と課題」についての報告と意見交換

「文化遺産の保存と活用」についての総合討議

ブータンでの受講風景

個別テーマ研修

2020年11月9日から11月20日まで、ブータンの22名の研修生に対し「リビングヘリテージの管理活用」をテーマにオンラインで実施しました。

本年は初めてリビングヘリテージに関する研修を実施しました。今回は仏教関係の建物などが現在も宗教活動に使われているという、生きている文化財・リビングヘリテージを多く抱えているブータンを対象としました。

個別テーマ研修の特徴は、参加者の要望に沿ったオーダーメードのカリキュラム編成ができることと、条件次第では英語以外の言語でも開催できることにありますので、オンラインでもその特質を損なわないように配慮し、従来よりも対象者を増やして実施しました。

今回の中身は、①行政における文化遺産保存管理体制、②寺院の文化財保存管理とそのシステム③GPS／GISを利用した文化遺産の管理活用からなります。

オンラインでのGPS/GIS実習

講義資料は英訳しました。従来口頭で説明していた部分は、英語に翻訳した上でネイティブスピーカーに読み上げてもらったものをビデオ配信しました。

質疑応答とデモンストレーションはZoomを活用し、英語で行いました。デモンストレーションはGPSの現地での使われ方に即した内容で具体的な手順を示し、GISを用いた活用が理解できるように現地からの質問に答えながら進めました。

総合討議の際には念のためブータンの公用語であるゾンカ語が分かる日本人コーディネーターの協力を得ました。文化財所有者との間で保存に関する合意を得ることの難しさなどが議論されました。また、オンライン研修と対面研修それぞれの特性についても意見を交換しました。

オンラインでの総合討議

研修生からのメッセージ

研修を終えて研修生の皆さんからは様々な意見・感想をいただきました。一部を紹介します。

- 文化財保護のためには補助金のシステムが重要と感じた。
- 国および地方レベルで文化財の指定制度が必要と思う。
- 日本もブータンも木材を用いた文化財が多いので、日本での修復過程は大変参考になった。
- GPSやGISを自国で活用したい。

カリキュラム（概要）

■オリエンテーション
世界遺産古都奈良の文化財

■文化遺産紹介
「世界遺産東大寺」「世界遺産元興寺」

■動画による講義
- 行政における文化遺産保存管理体制「奈良県における文化財建造物の保存管理体制」
- 寺院の文化財保存管理とそのシステム「東大寺の文化財管理体制・防災設備の現状と課題」「木造建造物修復のあゆみ」「元興寺文化財研究所その設立と活動」
- GPS／GISを利用した文化遺産の管理活用

■リアルタイムセッション
「意見交換：寺院の文化財保存管理とそのシステム」「デモンストレーション：GPS／GISを利用した文化遺産の管理活用」「総合討議・質疑応答」

■課題提出
参加者レポート提出

基調講演

国際会議

2020年12月22日、文化遺産保護に携わるアジア7か国の実務担当者をオンラインで結んで、「博物館と地域社会」をテーマに意見を交わしました。

ACCU奈良事務所では、過去2年の会議を通じて専門家だけではなく、地域住民との協働や自治体のサポート体制が、文化遺産保護にとって重要であることを確認してきました。

今回は、同様の視点から博物館とそれをとりまく地域社会の相互作用について考えてみたいと思います。2019年に開催されたICOM(国際博物館会議)京都大会でも議論されたように、博物館は文化・教育だけではなく地域発展の核となり得る存在と考えられます。

事例報告の資料は事前にインターネットを通じて参加者に配信しました。会議本番は京都と北海道、海外の6か国を結んでおこないました。はじめに、ICOM京都大会を主催された京都国立博物館の栗原祐司さんに「ICOM京都大会の成果と今後の課題　これからの博物館に求められるすがた」と題して基調講演をいただきました。

総合討論

総合討議では、まず吉村和昭さんから追加の事例報告をいただいた後、博物館における子供向けの行事について、カンボジアとウズベキスタンから追加の情報をいただきました。

村野正景さんは博物館がコミュニティに貢献すると述べられ、ネパールのパタン博物館、中国のディーメンドン生態博物館、マレーシアのジョージタウン、スリランカのゴールでの事例をもとにそれぞれの方に議論を深めていただきました。

田代亜紀子さんは地域全体を博物館と見立てるという考え方を紹介。各参加者から意見をいただきました。また、コロナ禍での博物館の対応についても状況の報告を受けました。

会議参加者

最後に栗原さんが、まとめとして人材の重要性と多視点の大切さを述べられて国際会議を終了しました。

今回は、オブザーバーの方にも各国の報告資料を事前にメールで配布しました。内容を理解した上で、会議でのやり取りを視聴いただけたと思います。日本国内からの33名に加え、海外14か国から27名もの参加をいただきました。

オンライン配信のスタッフと機材

参加者の皆さん

チャプ・ソフィアラ（カンボジア）
任和昕（レン・フーシン）（中国）
ミン・チー・アン（マレーシア）
カナル・サンディープ（ネパール）
ニラン・コーレイ（スリランカ）
オタベック・アリプトジャノフ（ウズベキスタン）
栗原祐司（京都国立博物館）
田代亜紀子（北海道大学）
村野正景（京都文化博物館）
吉村和昭（奈良県立橿原考古学研究所）

文化遺産ワークショップ

2021年1月25日から27日まで、スリランカを対象にオンラインで実施しました。

参加者の皆さん

ACCU奈良事務所が、海外の現地で行うワークショップ事業を始めたのは2007年のこと。スリランカを対象とするのは、2013年以来2回目です。前回は「木造建造物の保存」がテーマでしたが、今回は、「文化財写真の撮影方法」をテーマとしています。

この研修は、スリランカ考古局と博物館局という2つの機関の職員を対象としたもので、20名の方々が参加しました。

現地に行って実施することができないワークショップというのは初めての経験です。リモートなので講義・実演のビデオを視聴してもらうことが中心となってしまいます。そこで少しでも理解してもらいやすくするため、事前の準備を丁寧に行うことにしました。

ビデオには、スリランカの公用語のひとつで最も通用しているシンハラ語の字幕を付けました。資料もシンハラ語に訳しています。先方の通信事情も考慮してビデオ教材はオンライン上で専用ソフトおよびYouTubeで配信するとともに、USBメモリーに格納して郵送することで万全を期しました。研修生は25日からスリランカ中部の都市で世界遺産でもあるキャンディに集合して熱心に教材を勉強されたようです。

ビデオ教材を視聴して分かりにくかったことや、文化財写真撮影で困っていることについての質疑応答を27日にオンラインで行いました。講師の中村一郎さん（奈良文化財研究所）が研究所の写真スタジオから実演を交えながら説明をしました。

白い背景紙を用いる撮影への関心が高く、透明なガラス製品でもライティングを工夫することで、白バックで正しい色合いで正確かつ美しく撮影できることを見て、研修生は驚くとともに撮影法を学べたことをとても喜んでいました。

私たちも現地で求められていることがよくわかった質疑となりました。研修生からは実地での実習に対する希望が強くよせられて終了となりました。

写真撮影法に関するオンライン実習（奈良文化財研究所）

写真撮影法に関するオンライン実習（奈良文化財研究所）

カリキュラム

■オンライン講義

「文化財写真の基礎知識」「カメラの設定と操作（前半・後半）」「ヒストグラムの理解」「照明」「立体物の撮影（前半・後半）」「平面的な物の撮影」

■質疑応答（オンライン）

「文化財写真撮影での困りごと」

スリランカでの受講風景

文化遺産セミナー

2020年12月13日に、奈良市の奈良県文化会館小ホールで、「飛鳥・藤原の歴史的価値と世界遺産」をテーマに開催し、105名の皆さんが参加しました。

相原嘉之さんの講演の様子

世界遺産暫定一覧に記載された「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の推薦書（素案）が昨年3月、文化庁に提出されました。奈良県にはすでに、3件の世界遺産、「法隆寺地域の仏教建造物」「古都奈良の文化財」「紀伊山地の霊場と参詣道」があり、全国の都道府県で一番の件数となっています。さらに4つ目の登録を目指すのは、文化財が豊富な奈良県にはふさわしいことですが、遺産の価値を世界から認めてもらうには戦略が必要です。

飛鳥・藤原の歴史的価値さらに世界遺産としての価値を、明日香村教育委員会で長年にわたり飛鳥・藤原地域の遺跡発掘調査を担当された経験のある奈良大学准教授の相原嘉之さんに語っていただきました。

セミナー会場の様子

飛鳥・藤原の遺産群は20の資産で構成されています。それらを宮殿、仏教寺院、墳墓の3つに分けて詳しく解説されました。宮殿には飛鳥宮跡や藤原宮跡などが、仏教寺院には飛鳥寺跡や大官大寺跡などがあり、墳墓には石舞台古墳やキトラ古墳・高松塚古墳などがあります。

次いで、世界遺産条約が生まれた経緯、世界遺産に登録されるまでのプロセスを説明された後、飛鳥・藤原の遺産群が、世界遺産としての評価基準に適合しているかどうかを説明していただきました。

文化交流を証明する遺産であるかどうかについて。宮殿、仏教寺院、墳墓という古代宮都の主要要素が、6世紀末から8世紀初頭までの東アジアにおける価値観の交流を示しています。

文明や時代の証拠を示す遺産であるかどうかについて。地下に保存されている宮殿と仏教寺院跡と墳墓の各考古遺跡の詳細な変遷過程が明瞭に把握できる希有な例であり、律令制に基づく国家統治機構が短期間に限定された場所で成立したことを示しています。藤原宮跡はその全体像がわかる東アジア唯一の遺構として重要です。

飛鳥・藤原の世界的な意義について力強く述べていただき、聴衆の皆さんも理解が深まり満足されたようです。

セミナー開催案内のチラシ

世界遺産アンコール（カンボジア）にあるバイヨン寺院、尊像の微笑み

世界遺産教室

高校生148名が受講しました。

奈良県内の高校生を対象に、世界遺産研究家が出前講義を行い、世界遺産に関する知識を深め、文化遺産保護の大切さを理解してもらう機会を提供することを目的に世界遺産教室を開催しています。

奈良県は数多くの文化遺産に恵まれ、世界遺産も国内最多の3つあります。奈良県の歴史と文化について学ぶだけではなく、世界に視野を広げて世界遺産条約の意義、世界遺産の現状と課題について学ぼうという教室です。国内外の世界遺産映像の紹介や、クイズ形式の時間もあり、楽しく学習することができるように工夫していただいています。毎年、県内10校程度の高校で開催してきました。

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、4月から県内高校が一斉休校となったことから、開催希望校が大幅に減少し、4校となってしまいました。

状況はなかなか良くなりませんが、秋以降、先生方のご尽力によりウイルス対策に配慮した上で、この4校では予定どおり教室を開催することができました。

講師は長年、世界遺産教室の講師を務めて頂いています、フリーアナウンサーの久保美智代さんと、通訳の小野以秩子さん。お二人とも、久しぶりの講義となり世界遺産の魅力を熱く語っていただきました。

高校生の皆さんも、新型コロナウイルスの影響で、校外学習や修学旅行が延期や中止となり、寂しい思いをされていましたので、各地の世界遺産を現地で撮影した美しい映像を見て、講師の熱い語りを、終始熱心に受講していました。

ちなみにこのページの世界遺産の写真は参考資料で世界遺産教室の内容と直接の関係はありません。

西の京高校（久保美智代さん）

五條高校（小野以秩子さん）

開催校

（奈良県立）西の京高校・法隆寺国際高校・高田高校・五條高校

世界遺産シンクヴェトリル（アイスランド）
大西洋拡大の割れ目、右側はヨーロッパ大陸へ、左側は北アメリカ大陸へ移動中

Vol. 33
March 2021

文化遺産ニュース

世界遺産「バーミヤーン渓谷の文化的景観と考古遺跡群」

表紙の写真：バーミヤーン大崖の西大仏とジャガイモ畑

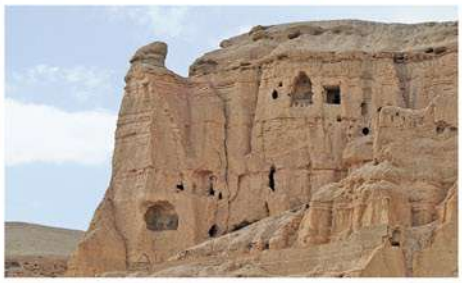
アフガニスタンには2つの世界遺産があります。2002年登録の「ジャームのミナレットと考古遺跡群」と2003年登録の「バーミヤーン渓谷の文化的景観と考古遺跡群」で、どちらも危機遺産にも登録されています。ここでは、バーミヤーンを紹介しましょう。

遺産の中心は、東西の大仏を始めとする多数の石窟を有する大崖で、700を越える石窟があります。仏堂として作られた石窟も多数あり、仏像や仏教壁画が残されていました。残念なことに大部分が破壊や盗掘を受けて失われてしまいましたが、いくつかの石窟に残る壁画から往時の姿を思い起こすことができます。

渓谷内には大崖以外にも石窟があり、仏教窟が集中しているフォラディやカクラクも構成要素のひとつとして世界遺産に登録されています。また、イスラム時代の都市であったシャフリゴルゴラや、砦跡のシャフリゾハックといった遺跡も残されていて、同じく世界遺産の構成要素となっています。

バーミヤーンは海抜2500m、急いで歩くと息が切れる高地にあります。谷の緑と茶色い崖、そして遠い山の万年雪と色合いも美しい、このバーミヤーン渓谷を気軽に訪れることができる日が来ることを願っています。

この遺産は「バーミヤン渓谷の文化遺産と古代遺跡群」と表記されることがありますが、ここでは、現地の発音に近い「バーミヤーン」、遺産名の英語・フランス語の訳語としてより適切な「考古遺跡群」と表記しています。



上左：上部の石窟群
上右：K窟に残る仏教壁画
下左：シャフリゴルゴラ
下右：シャフリゾハック

〈発行〉公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 文化遺産保護協力事務所

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 文化遺産保護協力事務所
Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

〒630-8113 奈良市法蓮町757（奈良県奈良総合庁舎1階）
TEL 0742-20-5001
FAX 0742-20-5701
URL http://www.nara.accu.or.jp
E-mail nara@accu.or.jp

交通アクセス

近鉄奈良駅から
- 徒歩約20分
- バス13番のりばから「西大寺駅行き」または「航空自衛隊行き」で、佐保小学校下車すぐ

JR奈良駅から
- 徒歩約20分
- バス西口15番のりばから「西大寺駅行き」または「航空自衛隊行き」で、佐保小学校下車すぐ